田村のつぶやき　第６号

2023.6.30 発行

文責：島根県立江津高等学校長　田村康雄

やりたいことが見つからない

久しぶりにつぶやきます。

周りの友達は進路の目標を具体的に決めているのに、自分は「やりたいことが見つからない」となんとなく焦っている人はいませんか。「自分が本当にやりたいことを見つけなければならない」とあたかもそれが努力すれば必ず見つかるもののように語られ、プレッシャーを感じる人もいると思いますが、それが見つかるかどうかは、極端にいって「運」次第だと思います。ただし「運」次第だからといって、見つけるための努力をしなくてもよいということではありません。いろいろなことに興味をもち、やりたいことを見つけようとすることは、この場合、どこかに当たりクジがあることを信じて、あきらめずにクジを引き続けることに似ています。クジを引いたからといって必ず当たるわけではありません。しかし、クジは引かないかぎり当たることは絶対にないからです。

先月の講演会で講師の小川奈緒先生が「好きなもののタネは自分の中に落ちている」「好きは一つじゃなく次々に現れる」「得意と好きは似ている」「苦手も大切なヒント」「動き出せばチャンスは開けていく」というお話をされました。これらの言葉の中にも、自分のやりたいことを見つける手がかりがあります。

「学校の勉強が将来何の役に立つのかわからない」という声もよく耳にします。自分が本当にやりたいことが見つかっていない人にとって、そう思えるのはむしろ当然です。自分が本当にやりたいことが見つかるかどうかは「運」次第ですから、いつ見つかるのかも、それがどのようなものなのかも、見つかってみるまではわかりません。ただ言えることは、いざそれが見つかったその時、それまで身につけた学校の勉強は、非常に役立つものに、驚くほどガラッと変わるということです。それこそ「ただ石ころだと思っていたらダイヤモンドだった！」くらいの変化です。ですから、今いくら「将来何も役に立たないこと」だと感じられていても、先々においては決してそうではないのです。周りにいる大人に質問してみてください。多くの人が「こんなことなら学生時代にもっと勉強しておけば良かった」と答えると思います。石ころだと思っていたのに実はダイヤモンドを捨ててしまったと嘆いているのです。

個人的な話で申し訳ないが、高校生の頃の私は、特にやりたいことや明確な将来の目標があったわけではありません。はっきり言って、高校生の頃は、高校の教員になるとは全く考えていませんでした。ただ歴史は好きだったので、大学でもっと歴史の勉強をしたいと思い、文学部の史学科に進学しました。大学卒業が近づくにつれ、そろそろ将来のことを考えなくてはと思い、せっかく歴史の勉強をしたのだから、それを活かせる仕事がいいかな、という安易な気持ちで教員採用試験を受けたら「運」よく受かったというわけです。教員という仕事が、本当に自分に向いているのかは正直わかりません。別の選択肢もあったかもしれません。しかし、今ではこの仕事を選んで良かったと感じています。世間では、教員の仕事は「ブラック」と言われていますが（確かに本校の先生方も本当に日々忙しいです）、とてもやりがいのある魅力的な仕事です。生徒のみなさんの中で、将来島根県の教員になろうという人が一人でも多く出てくれると、こんなに嬉しいことはありません。